

# 大陸（南支）

## 終戦直前の南支勤務

島根県 手 銭 初 栄

私は農家の次男に生まれましたが、長男が幼時早世したので実質は後継者として育ちました。父は五十歳を過ぎたばかりで元気に働いていました。母、祖母、妹と皆が元気でした。

農業学校卒業後、出雲大社の修練道場の指導員として勤務しました。戦時下の修練道場の日課はとても厳しく、指導員の私は生徒の先頭に立って毎朝厳冬といえども裸で井戸水を頭からかぶって「禊」の行を行いました。その激務の故か座骨神経痛を患い修練道場を

退職し、郡農業会の食糧増産指導員として働いている時赤紙召集令状を受け、昭和十八（一九四三）年四月十二日、浜田西部第三部隊に入隊しました。これですらと友人先輩たちに負けず、お国のために軍務に服することが出来ると心を弾ませて入隊しました。

私たち今度の召集兵は、中支に駐屯していた開部隊要員としての召集でしたが、その中で特業要員とか幹部候補生要員とかで七十人ほど補充隊に残留することとなり、初年兵教育は補充隊で行われました。

その頃部隊で逃亡兵事件があり、各隊幹部は私的制裁の絶無について細心の努力を払われていました。このために私達初年兵は大助かりでした。表面上の私的制裁、殴る、けるはやみましたが、依然形の変変わった初年兵いじめは続けられました。例えば班内の古年兵

に南京虫負けの人がいて、南京虫に刺されるとその痕跡に膿が生じ瘡となる厄介な体質で、そこで我々初年兵に南京虫退治が命ぜられました。我々は藁布団や毛布をめくり、床を這い回って南京虫捜しに懸命な努力を続けなければなりませんでした。

もう一人の古兵は床に疔を吐き飛ばす。他班の廊下に行き行って疔を吐き飛ばし、この始末は我々初年兵の仕事となります。またある古兵は初年兵の軍靴を隠します。軍靴なしでは寸時も働けません。その初年兵は青くなって軍靴捜しに走り回らなければなりませんでした。

私も一度洗濯して乾燥場に干しておいた襦袢を盗まれ、班付きの上等兵に恐る恐る相談したところ「一度胸試しに一つ盗んでこい」と指示され、隣の中隊の物干し場から目をつむって一番ボロボロの古いのを盗んで帰りました。盗まれた隣の中隊の兵の心中を思うといつまでも胸のふさがる気がします。

私は召集兵でもあり、幹候志望だからとて他の初年兵以上に辛い目に遭うこともありません。何でも衛生

兵は勤務が楽なようだから、幹候を取り消して衛生兵に志望を変更しようと考えて父に相談の手紙を出したところ、中隊の曹長殿に検閲でその手紙が見つかってしまいました。曹長殿からひどく叱られ「こんな非常に進んで困難に当たる覚悟で立派な将校を目指して頑張れよ」と激励を受け、自分の心得違いに気付いて、それからは心を入れ替えて頑張りました。

初年兵教育終了後は、雑多な勤務使役が続きました。酒保の使役、将校集合所の雑役、連隊本部の清掃作業等いろいろな雑役が続きました。この勤務の中でいろいろと見聞きすることが沢山ありました。その中で将校たるものはかくありたいものだとの一つの将校の像を頭に描いて、自分の反省の資に供して心を励まして勤務を続けました。

翌十九年一月二十日、熊本陸軍士官学校に入校しました。当初は第三中隊でしたが、入校後三カ月経過して大編成換えがあり、機関銃中隊の生徒は豊橋の予備士官学校に移り、私は熊本の第一中隊に移りました。

中隊長は甲木少佐で古武士のような謹厳な方でした。区隊長は内之八重大尉で全く申し分の無い区隊長で、陸士五十三期を卒業し既に中支戦線で中隊長等を歴任された方で、演習も内務も敵しかなかったのですが生徒の面倒は温かく見守っていただきました。

訓練演習は学校が旧熊本城内二の丸にあって付近は市の中心街であったので、帯山練兵場まで五キロほど回っての演習場往復が続けられました。この往復の間、軍歌を唱和しながらの行進は、道行く市民の声援を浴びた行進でした。

野営訓練は阿蘇の「浅の敷」「大矢野原」別府の「日生台」等で、実弾を用いる小隊戦闘射撃訓練等を含め、広い演習場を終夜這って這って這い回り、袴のひざが破れるほど這い回りました。特に挺進奇襲の演習は目的地に潜行し奇襲をかける訓練で、阿蘇から目的地熊本近郊の地点に図上直線を引き、その線上を敵に見見されること無く近迫し奇襲をかける演習でした。

南方ジャングル内の行軍は方向維持が難しく、進路

上の障害物を避けて方向を変えてしまい失敗が多かった戦訓からの訓練で、四泊五日、不眠不休、野宿でした。この間、区隊長はじめ区隊長教官の生徒の小隊長、分隊長としての指揮掌握について細部の指導が繰り返されました。体力の限界を尽くした訓練であり、突入成功は一心からの歓喜であり、相擁して喜び合いました。

また内務では空腹に耐えかね炊事場に物盗りにもぐり込んで発覚して退校処分となり、原隊復帰を命ぜられた候補生もおり、戦時下の予備士官学校とて食糧事情は十分ではありませんでした。

ある夜は、事件はささいなことでしたが、将校生徒としてあるまじき行為として、区隊一同校内に祭られている宮内神社の社前の玉砂利の上に正座冥想の反省が行われました。この神社は開校以来の卒業生の戦死者の御霊が祭られてあり、加えてこの予備士官学校は西南戦役当時の歩兵第十三連隊の跡です。戦役の一年前の明治九年神風連が突入した兵舎の跡でもありません。当夜の遇番士官少尉候補は西郷軍の揚げる連隊旗

を窓越しに引き奪い取り、旗の布地の部分を腹に巻き、戸外にうち出て乱刃のもと斬死したために軍旗は血潮に赤く染まった「軍旗血染めの跡碑」が傍らにある場所でもありました。夜が更けると共に靈氣のひしと立ち込める神社前の反省正座でした。

こうした教育期間のある夜、区隊長から喚問がありました。何事かと案じて伺ったところ「手銭候補生は次男となっているが？」との問いに対し、私は「戸籍上は次男となっていますが、長男は夭逝して実質上は長男です」と答えました。区隊長のお話によると挺進特攻隊要員の選考中だとのことでした。挺進特攻隊は四船艇で敵の艦船に近迫し、爆雷攻撃が目的の特攻隊であり、中隊から十人ほど選考され、私は除外されました。この特攻隊は沖繩、比島戦で実施されましたが、敵艦船に近迫するまでに撃沈され成功例は少なく、後は斬込隊に変わった者が多くいました。

昭和十九年八月十五日、七カ月の教育の血のにじむような激しい教育を無事終了し、見習士官に進級し、原隊の西部第三部隊に復帰しました。

私達第十期生の中には原隊が比島派遣師団の人もたくさんおり、彼等は卒業と同時に敵潜の跳梁する海を越え比島の原隊に復帰し、比島玉砕部隊の小隊長として、あるいは海上輸送船上で、多くの同期生が護國の華として散りました。

部隊復帰後、広島師団教育隊で見習士官の集合教育が実施され、それに参加のため派遣されましたが、私はその時親しらず歯が生じ、その歯の根が横に向かつて生えていたので抜歯が非常に困難で、集合教育期間中ほとんど教育に参加することなく、歯科医通となりました。

帰隊後、中隊に復帰しましたが、昭和十九年十二月の連隊将校全員の忘年会の席上、突然私に小倉高射砲連隊転属の命令が届き、中隊長の厚意ある計らいにより帰郷する機会を与えられました。

出征の日、生還を期せずの覚悟でしたので、この帰郷で父母や妹との再会、しかも見習士官の晴れ姿での帰郷は夢のような喜びでした。家族、親類一同、喜んで迎えてくれました。その時偶然私宅に私の安否を尋

ねて立ち寄っていた小学校時代の恩師の森脇先生と、晴れ姿の私とが並んで写った写真が今でも残っています。

帰隊すると、私の小倉転属は取り消しの命令が出ていました。帰郷は全く夢のようなことでした。

昭和二十年一月十日付、少尉に任官辞令と同時に独歩第十九旅団歩兵第六二二大隊小隊長を拝命しました。この編成は西部第三部隊で行われ、編成完了後、直ちに十六日屯営出発と慌ただしい日程でした。そして門司港を二十六日に出港して征途に向かいました。

この頃の渡航は制海権も制空権も共に米軍に移行していて、また日本の艦船も損耗の激しい時期であり、私の乗艦した輸送船もわずか一二〇〇トンの小型輸送船でした。船は黄海を朝鮮西海岸に沿って北上し、仁川沖から中国大陸の沿岸に沿って南下して航行を続けました。海は冬の気候のこと故、毎日の大荒れで、船は揺りかごのように揺れ動き、兵も船酔いでフラフラで足腰が立たない状態でした。

船員の話によれば、航行途中、数次敵潜の魚雷攻撃

を受けたが輸送船が小型の故か命中を免れ、一度は命中したと思われたが、この船の吃水が浅いので魚雷が船の下を通過して、命中を免れたとのこと。全く薄氷を踏む思いの渡航でした。

こうして半月、敵潜の跳梁する荒海のシナ海を航行し、全く天候に助けられ無事汕頭に入港し、上陸した将兵は全く夢遊病患者の集団のような船酔い将兵の上陸でした。

旅団の無事上陸を心配して汕頭に待機していた師団長近藤新入中将より、我々を迎えて将校全員に訓示が行われましたが、船酔い中の我々は頭の中に訓示の内容が残念ながら残りませんでした。

兵は船中で発生した虱退治で、大釜に熱湯を沸かして衣服を投げ込んで、三回ぐらい繰り返すという懸命の努力が続けられました。

汕頭に上陸した後、汕頭近郊の外砂郷の警備に当たりました。我々の部隊は浜田で編成した新設部隊であったので南支戦線は一切手探りの状態でしたが、浜

田で編成が決まった時から、以前中国で前線勤務の経験者であった隣中隊の小笠原中尉から、出港までの余暇を利用して再三講義を受けていたのが大きく役に立ちました。

中隊はさらに警備地域の移動があり、樟林へと移り、私の小隊は「獅子山」「鶏了山」の二個分哨を担当することになりました。この両分哨とも低い丘の上に設けられており、陣地も兵舎も前警備隊の設備をそのまま引き継いだものでした。陣地の銃座、散兵壕、交通壕も共に手掘りでコンクリート掩蓋等はなく、陣地からやや退いた低地に木造兵舎があり、中央に三和土の通路、両側は板張りの床上に寝具が配置された普通の兵舎でした。

この分哨に勤務している間、私に与えられた任務に付近の住民の宣撫工作があった。そのために師団から派遣されたアボンと称する台湾出身の宣撫班員と兵一人を連れて、部落から部落へと隔日の宣撫工作の日が続きました。付近は寒村で、部落から部落の距離は遠く離れていたので移動にはかなりの時間を要しまし

た。

この地方は荒蕪地が多く、山地には樹木もなく一面の野原が続き、水田、畑地もごく稀に見るほどしかなく、住民も小児や若力を見かける程度で、良民や婦人等に路上会うことは多くありませんでした。

こうした寒村でも村長宅は堂々たるもので、立派で豪壮な玄関を通じて邸内に入ると室内調度も目を見張る立派なものばかり。村長は悠々たる大人で旧華僑として南方で成功して帰村した人らしい。親日家として通しているので手の下し方もありません。帰隊して中隊長に報告し、随分うらやましがられました。

住民との交流は少なく、ために我々将校は金銭を消費する機会はほとんどありませんでしたが、日本軍軍票は価値が日一日と下がり、一方米ドルが非常に高値で取引されているとのことでした。

私はここで第一三〇師団第九十四旅団独歩第六二二大隊付転属の命令を受け、せっかくなじんだ中隊を離れ、汕頭を通過して新任の部隊へと赴任しました。こ

の大隊の第一中隊の第二小隊長を命ぜられ、部下小隊を掌握することが出来ました。この部隊の兵は貨物廠等から繰り入れられた訓練木熟者も交じった、精鋭とはかなり縁の遠い部隊でした。今までの南支軍の転出後の地区の防衛を引き継ぐ新編部隊であったと思われる。

ここで師団は広東地区の防衛を引き継ぐため汕頭地区より広東地区への大移動が行われました。その移動距離は六〇〇〜八〇〇キロはあったと思います。この大移動に私は幸運にもふとした事で途中の樟林まで貨物自動車三台の輸送を依頼されました。早速中隊の歩行不能者と貨物を三台のトラックに満載して指揮して先行することになりました。

樟林でトラックを依頼者に返納して、暫時中隊の到着を待ちました。到着した中隊の惨状は目を覆うものがありました。足裏は半分もある大きな靴傷を作っている行軍を続けた兵たちがほとんどです。そこから広東地区までは私も行軍に加わりました。暑さの中、汗と涙の行軍が幾日となく続きました。途中米兵一人と中国

人スパイ一人が憲兵に検挙され頭から麻布をかぶらされて連行されるのに出会いました。彼等は海上の米艦船と無線で連絡し、日本軍の施設を自在に砲撃していたとのこと。広東海域の近海も既に制海権が米軍の手に移っていたことが察せられます。

我々の広東地区の警備地南崗付近は海岸線から四〇キロほど離れた丘陵地帯で、土質が軟弱で掘削は容易でしたが、砲爆撃に対する抗力が弱く、待避壕等は地下一〇メートル掘り下げねばなりませんでした。陣地は籠城一カ月以上持久を期し策定され、陣地の編成、弾薬の備蓄、兵員の訓練と毎日大わらわで働いていた最中、終戦を迎えました。

捕虜生活に入ってから米が少なく現地自活で飢えをしのぎました。野菜栽培に人糞尿を使い過ぎて回虫の発生の原因となり、これが駆除にセンダンの樹皮を煎じて飲用する等ひとかたならぬ苦勞を続け、生き残るため手段を選ばず努力を続けました。

浦賀上陸時、部隊解散と同時に兵隊が上官に向かって飛びかかって暴行に及んだことは、この部隊が新設

部隊であって上下の和睦が十分取れていなかったことに起因するものと思われ残念に思います。

戦後は農事に復し、特にブドウ栽培に力を入れて農家経営を続けました。私も妻と共に元気に老後を楽しんで送っています。

## 戦争の思い出

愛知県 中野泰男

昭和十二（一九三七）年七月七日、蘆溝橋事件が支那事変の発端となり、日本と中国との戦争は拡大の一途をたどった。そのため村内でも召集令状がきて出征する者が次第に増え、銃後では、出征留守家族慰問、出征家庭の仕事手伝い等で青年団の役員等をしていると、自分の家の仕事などは思うように出来なかった。村内の若者たちは海軍工廠や軍需工場へ行き非常に少なくなったので、青年団の役員は万年役員のようになってしまった。事変が大きくなればなるほど銃後も

苦しくなり、万が一にも私に召集令状がくれば、目が悪く（緑内障）仕事もままならぬ父と母、小学生の弟を残して出征しなければならない。家が困るのは目に見えている。警察官にでもなっておけば召集中も給料が頂けるので、そのお金で日雇いでも頼めば父母は助かる。そうすれば私も安心してお国のために御奉公出来る。いっそ思い切って警察官になろうと決心して、豊橋警察署に志願書を提出し受験した。試験には一発で合格した。そして昭和十四年三月一日、愛知県巡査を拝命し名占屋の笹嶋警察署に勤務した。

このことについては家でも親戚でも不満な人がいた。

### 召集・入隊

昭和十五年十二月十日、「昭和十五年十二月二十日第十八連隊に入隊すべし」という赤紙「召集令状」がきた。

笹嶋警察署派出所管内では大勢集まって送別会をしてくれた。一宮村松原区でも送別会が開かれ、氏神様